

[北海道演習林]カバ類の山地直播造林試験

矢野, 虎雄
九州大学農学部附属演習林 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/1456122>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和37年度, pp.42-46, 1963. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :

(IV) 将来の見越し

今後下木トドマツの伸長にともない、上木のウツ閉度をどのように操作すべきかを、特に今後の主要課題として、観察と測定を続け、その解明に努めたい。

カバ類の山地直播造林試験

矢野 虎雄

(I) 研究の目的

短伐期林業樹種として将来を期待されるカバ類の山地直播造林について播種の時季、整地、播種量、方法、施肥及び発芽状況、発芽後の稚苗の成長推移、気象その他被害に対する抵抗、保護、保育、労力、経費などにつき解明しようとするもの。

(II) 方法

(1) 試験地設定

秋播区

昭和36年11月2日、10林班10伐区内伐跡地（傾斜5°内外、笹生地、稍々湿地）内に、マカバ（北見地方産の種子）シラカバ（産地、マカバと全じ）各々0.25haを設定

春播区

昭和37年5月8日、10林班3伐区内伐跡地（傾斜15°内外、笹生地）内にマカバ（種子北見地方産）0.08ha、シラカバ（種子北見地方産）0.07haを設定

(2) 整地、播種

地被物は全刈を行い、列間2尺、播種穴間隔6尺とし、播種穴は直径約30センチの円形に掘起し、草、木根を除去し、土

を細かく碎き、一穴当平均2ノグラム of 肥料(硫酸ノ、過燐酸石灰3、加里0.5の割合で混合)を施し、土と攪拌した。

播種は一穴当0.5~0.6グラムを播き、軽く攪拌し、足にて踏みつけ、各穴に赤色のマークテープにて位置を標示した。

(III) 経 過

秋播区(昭和36.11.2播種)はそのまゝ越冬し、翌年融雪後4月下旬から5月上旬にかけて発芽、春播区(昭和37.5.8播種)は5月下旬に発芽した。発芽後はそのままの状態にて何れ保護を加えず放置のまま夏を越した。播穴は周囲の笹類が伸び、掩いかぶさり、庇蔭の状態に置かれた。9月12日(春播区は9月13日)に播穴周囲の笹類を刈刈し、同時に播穴の除草と無作為的に抽出したシラカバ区とマカバ区各々10ヶの播穴について稚苗本数を測定した。結果はオノ表の通りであった。

(オノ表) オノ回稚苗本数調査(昭和37.9.12~13調査)

時季 樹種 播穴	秋播区		春播区		摘 要
	マカバ	シラカバ	マカバ	シラカバ	
1	43 ^本	15 ^本	76 ^本	22 ^本	秋播区 昭和36.11.2播種
2	32	10	48	35	春播区 全 37.5.8播種
3	37	29	39	73	
4	50	36	40	29	
5	21	14	127	15	
6	56	30	86	36	
7	46	57	42	92	
8	38	41	79	55	
9	42	59	58	24	
10	15	45	35	36	
平均	38	34	63	42	

ついで、このまゝの状態を越冬し、翌年38年5月1日にオ2回の稚苗本数調査を行った。この場合オ1回調査とは無関係に無作為的に抽出した各区10ヶの播穴について測定した。結果は、オ2表の通りであった。

(オ2表) オ2回稚苗本数調査 (昭和38.5.1調査)

時季 樹種 播穴	秋播区		春播区		摘 要
	マカバ	シラカバ	マカバ	シラカバ	
1	11本	28本	98本	11本	
2	14	18	35	6	
3	10	22	91	10	
4	24	30	27	35	
5	4	19	19	92	
6	9	20	32	33	
7	11	26	20	40	
8	27	23	67	5	
9	59	32	84	26	
10	13	17	64	35	
平均	18	23	54	27	

このオ2回調査の際「対照区」として各区に「無間引区」を一列残し、全面的に一播穴に稚苗10本内外を残す程度の稚苗の間引を行った。

(IV) 成 果 (考 察)

以上現在までの経過について中間的な考察を試みると次の通りである。

- (1) 当初期待していた以上に山地直播における発芽が良好であった。この結果からすると、播穴作り、播種操作など少々丁寧に過ぎ、又播種量も少々多過ぎの感がある。資材節約、省力上-

考を要する。

- (ロ) 発芽後盛夏を越し、9月/2～/3日に坪刈を行った際、種苗を観察すると、永らく笹の繁茂のため花蔭に置かれたため、ややセン弱な姿態をしていたが、坪刈、除草を今少し早目(6～7月頃)に行うべきではなかったかと思われる。
- (イ) 播穴個々の個所と発芽の良否を観察すると、葎筋に近い区域中、下腹にても小さい凹凸の凸部、花蔭の笹、雑草などの少ない筈で明るい、やや乾燥した処の播穴が概して発芽良好で、その反対の個所は一体に発芽不良の傾向が見受けられた。
- (ニ) 春播と秋播の発芽の良否はオノ表に示す通り、マカバ、シラカバ何れも春播の方が良好であるが、この原因は果して播種の時季によるものが、立地その他の条件によるものか速断しがたい。ただ秋播の方が春播より春先発芽がやや早いといふことは言えるようである。
- (ホ) オノ表とオノ表との対照によつて、発芽後における種苗の気象現象(寒、霜、旱魃、雪、風等)その他外部の諸被害に対する抵抗状況が判るが、何れもオノ表調査の本数に対し、オノ表調査では、相当数の種苗が死滅している。即ち、秋播区で、マカバ52%、シラカバ32%、春播区ではマカバ14%、シラカバ35%、平均して33%、即ち約 $\frac{1}{3}$ 程度の種苗が死滅した。
- (ハ) シラカバとマカバでは、春、秋播何れもマカバがシラカバより発展がやや良好であつた。

(V) 将来の見透し

以上の観察、測定の結果からのみにては、今直ちにカバ類の山地直播造林の将来について速断は許さぬが、言えることは発芽は比較的容易であるので、発芽後の種苗の保護、保育などの操作が適正であれば、将来の見透しは明るいと言えよう。

望むらくは、今一層経費と労力を省いた簡易な方法が攻究される

べきであろう。

湿 地 帯 造 林 試 験

矢 野 虎 雄

(I) 研究の目的

本演には北海道特有の湿地帯が相当面積を占めているので、これら地域に適する造林樹種を選定するため、主として“湿地帯における適応性”と“野兎単害、氣象的被害、菌類の被害等諸被害に対する抵抗性”に重点を置き、有望樹種と見られる「ストロースマツ」「マテカモ」「ドイツトーヒ」「クイマツ」等につき究めようとするもの。

(II) 方 法

湿地帯25林班内の人工造林地(昭和35年4月植栽)内に植栽と同時に次の通り試験地を設けた。

(オノ表)

樹 種	面 積
ドイツトーヒ	0.10
ストロースマツ	0.08
クイマツ	0.08
マテカモ	0.10

(III) 経 過

(1) オノ回調査 (昭和35年10月)